

## 一関市の中学校、放射能キャリア教育の異常！

### ～ 放射線副読本(服毒本)に洗脳されていく子どもたち ～

岩手県の一関といえば道内の修学旅行の定番コースの一つに入るなじみの深い場所だ。しかし、福島第1原発事故による放射能雲が流れてきて、高濃度に汚染されたホットスポット地域になってしまっている。私の知っている一関市の中学校理科の先生の報告によると、**校内の敷地の随所に高い放射線が測定されている**そうだ。しかし、そうした情報は生徒には知らせないよう行政の圧力が働き、「放射能」という言葉すら口に出来ない雰囲気になっているようだ。その一関市で、文部科学省が作成した**「放射線に関する副読本」を元にした授業を開始された**との報道が岩手日日新聞に載った。**この副読本は、元々、原子力の安全性を子どもたちに刷り込むことを目的に作成されたもの**である。福島第1原発事故で安全神話自体が崩壊し、安全審査自体も嘘にまみれた内容だったことが白日の元に晒されたことから、見直しがされたものだ。結局、原発の安全神話に関連する内容だけを削除し、導入としての「放射線の性質」を残した形で再編集された経緯がある。原発安全神話洗脳マニュアル書の一部を改訂しただけの資料だ。

原発事故から1年、原子力村の勢力が本格的に巻き返しに転じた動きの一つである。～まずはニュースより～

「放射線」をテーマにした県立一関一高附属中学校(木村毅校長、生徒238人)のキャリア教育授業は23日、一関市

磐井町の同校で行われ、全校生徒が東北大学院工学研究科の藤原充啓助教(工学博士、量子エネルギー工学専攻)の講演や大学院生による劇を通じて基礎知識を学んだ。

藤原助教は、**放射線に関する副読本(文部科学省発行)を基に▽放射線物質、放射能、放射線の捉え方▽放射線の種類と性質▽身近な利用例▽人体への影響**などを説明。福島第1原発事故に触れながら「『放射能漏れ』ではなく、正しくは放射線を出す能力がある放射性物質を漏らしている。それぞれの意味を理解し、区別しなければ」と指摘した。

電離、蛍光、透過の性質を持つ放射線の利用例としてX線撮影やがん治療、タイヤの強度アップ、害虫駆除などを紹介。**人体への影響について「がんとは直接関係ない」とした上で**「放射線を浴びるとDNAの一部が傷つくこともある。壊れた細胞の修復過程の変異でがんになるケースはあり得る」と述べた。

「放射線は自然界に存在しているが、**見えない、感じられないから怖がられる**」と語り、身を守る方法に距離(放射性物質から離れる)、時間(放射線を受ける時間を短くする)、遮蔽(しゃへい)(コンクリートなどの建物に入る)の3原則を挙げた。

同高OBを含む大学院生による劇は「怪盗X(放射線)の功罪を問う裁判員裁判が舞台。検察側は「人の体を通り抜け、情報を盗み出した傷害、窃盗の罪」を主張し、**弁護団が放射線の性質や高度利用例を説きながら「無罪」を立証した。**

**裁判員を務めた中学生5人の判断は全員一致で無罪となり、**裁判長役の大学院生が「放射線は正しく使えば非常に役立つ。皆さんにも、この最先端科学を学んでもらいたい」と呼び掛け、閉廷した。

生徒会長の〇〇〇君(2年)は「**放射線の分野に興味を持つことができた。教わった知識を今後に生かしたい**」と話していた。

【写真】藤原助教(中央)の講演や大学院生による劇を通じ、放射線の基礎知識を学んだ一関一高附属中キャリア教育授業 2012. 2.24 岩手日日新聞



多くの国民が放射能の被害に苦しんでいる中であって、このような教育を堂々とやる神経が理解できない。しかも、その内容は、放射線の危険性をできるだけ隠して、利用面だけを強調する詐欺的な構成になっている。

**放射線はどんなに少量であっても確実にDNAを損傷させる極めて危険なものだ。**だからこその怖がられるのだ。**見れる・見えない、臭いがしないレベル問題ではない。**妊婦にX線検査を受けさせないのは、生まれてくる子どもに白血病やダウン症など深刻な影響がでることがはっきりしているからだ。放射線被曝は最小限に抑える必要があることは医療の基本中の基本だ。**この大学の助教は「ガンとは直接関係ない」と明らかに嘘を説明している。**その嘘を追求することもなく報じている岩手日日新聞。スポンサーに懐柔されたメディアのなんとも哀れな姿だ。

怒りで震えている保護者も多いはずだ。これは明らかに県教育委員会が国の要請に沿って強引に押し込んだヤラセ授業だ。教育もここまで地に落ちたか……。他所の学校のこととはいえ、恥づかしいの一言である。

# 2011年3月20日、一関をおそった放射能ルート！

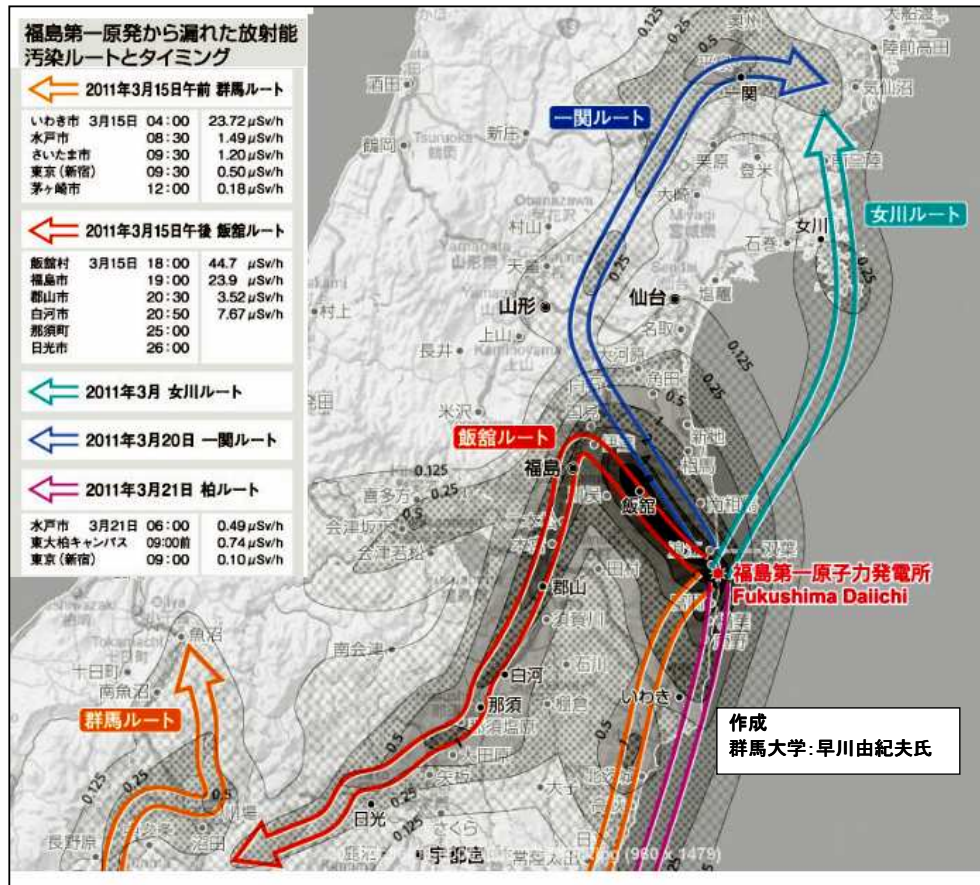
## ～ 平泉・毎時0.5μSvレベルの放射性物質が降り注いだ ～

群馬大学の早川由紀夫氏の放射性物質拡散予測地図(下図)によると、3月20日に放射能ブルームが一関方面に向かい、山間部に囲まれた平泉や一関一帯に降り注いだ様子がわかる。早川氏の予測地図は実測値を元に何度も改定されているので、ここに示された放射性物質の拡散は現実にはほぼ近いと見てよい。

一関・平泉といえば世界遺産にも指定された東北地方屈指の観光地である。汚染レベルが高いということになれば観光に与える打撃は甚大である。すでに東北地方への修学旅行をはじめ国内外からの旅行者は激減している。キャリア教育に名を借りた「放射線教育」は、経済的な打撃を是が非でも回避したいという地元の焦りと、被害の実相を限りなく過小評価し、賠償を最小限に抑えようとする国側との思惑が一致した動きだろう。

しかし、情報共有化の時代にあつては、**事実を隠そうとすればするほど不信感が増大し、結局、逆効果につながる**ことを知る必要がある。**危機管理の専門家は「事実を正確に伝えることが、パニックを防ぎ被害拡大を予防することにつながる」と述べている。**

地図を見ればわかるように山間地の盆地に町がある。山林に降り積もったセシウムなどは雨水に溶けて中心部へと集まり濃縮されるだろう。そうなる**マイクロスポットと呼ばれる超高レベルの汚染地点が複数形成される**ことになる。**正確な情報と注意喚起を図らなければ子どもたちに被害が広がる可能性がある。**「放射線の利用」などと洗脳教育をしている場合ではないはずだ。



作成  
群馬大学: 早川由紀夫氏